Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

髪が結ぶ、五人の約束

夏の邂逅・新緑の下で

灯島史料

増補版

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

目次

夏の邂逅・・・・・・2
新緑の下で・・・・・4
アナザーストーリー　12

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

夏の邂逅

蒸した空気に包まれた夏のある日。

公園の日陰で、Ｔシャツにジャージを羽織り、ジーンズ姿で寛いでいる五人の若い女性――サヤカ・マイコ・ナツミ・シオリ・ユキコに出会った。

「今日は久しぶりに皆んなフリーで、リアルに顔を合わせることにしました。公園は、いつもの集合場所になっています」

サヤカが切り出した。ジーンズは五人で集まるときの定番で、落ち着けるスタイルだ。デニムコーデが好きな点でも五人は一致している。季節や天候などにより、上に着る服は変わる。五人で公園に集まるときのお約束で、統一されたコーディネートはナツミが決めている。

彼女たち最大の共通点は、背中から腰の近くまで伸びたストレートのロングヘアだ。サヤカの豊かな髪に憧れて、知り合った頃はベリーショートだったユキコ、ボブだったシオリ、セミロングだったナツミ、背中までのロングだったマイコが髪を伸ばしてきた。「腰の長さで全員揃えるのが夢」と、彼女たちは口を揃える。

その髪が、五人の絆そのものだと感じた。

「よかったら、一人ずつ髪のポートレートを撮らせてもらえませんか？ 皆さんの髪への想いを、写真に残したいんです」

筆者が問いかけると、五人の顔が一斉に輝いた。「本当ですか？ うれしいです！」「ぜひお願いします！」と喜んで頷いた。筆者は彼女たちより少し年上の女性である。出会った際に身分を明かしたことも、信用や安心感を得られたのであろう。

はじめに五人の後ろ姿を撮った際、約束の象徴であるロングヘアを撫でて背中へ流す仕草に、色香が漂っていた。

五人の中心的な存在となっているサヤカ。腰まで届くロングヘアだ。風に乱れる髪を抑える仕草も手慣れている。

「時間はかかったけれど、腰近くまで伸びてきて、うれしいです。愛おしくて、もう完全に切り離せない身体の一部になっています」とサヤカに次いで長いナツミが話し、ほかの四人が同意するように頷いた。ロングヘアを維持する上で、夏の暑さは全然苦にならないという。

「早く皆んなに追いつきたい」と話すのは、最も髪の短いシオリである。サヤカからは「焦らなくていいよ。きれいに伸ばすことが大事だから」と言われている。

前かがみの姿勢から直立する勢いで、髪を逆立ててみせたのはユキコだ。学生時代はスポーツに打ち込んでいた、彼女らしさを感じる。「長い髪だからできることを楽しんでいます」と、屈託ない笑顔で語る。

マイコは撮影時にヘアブラシを持ち出す。丁寧に梳かす様子が印象的だった。

別れ際に筆者はサヤカと連絡先を交換し、五人の髪が腰まで揃った暁の再会を約束した。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

左：ヘアブラシで髪を梳くポーズを取るマイコ。右：伸びてきた髪に触れて微笑むナツミ。

左：髪が早く伸びるよう願うシオリ。右：思い切り髪を逆立ててみせるユキコ。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

新緑の下で

筆者の携帯にサヤカから着信が届いたのは、夏の出会いから二年後の春である。
彼女が指定した日時に、同じ公園へ向かった。
新緑の季節まっただ中であり、木々は若葉色でまばゆい。

サヤカ・マイコ・ナツミ・シオリ・ユキコの五人が、公園内で待っていた。
白いブラウスとジーンズ姿。そして何よりも、五人の黒髪が腰まで真っすぐ伸びている。

挨拶を交わして早々、筆者は言わずにいられなかった。
「皆んな、同じに見えますね」
五人が後ろ向きに並んだら、誰が誰だか分からないだろう。

「それ、今の私たちには最高の褒め言葉です！」
ユキコが声を弾ませ、四人に同意を求めた。四人とも笑顔で頷く。
サヤカが口を開いた。
「たしかに見た目は同じです。でも中身は一人ひとり違いますよ」

筆者は個別にポートレートを撮りながら、インタビューを試みた。
二年前の夏に出会った際は写真に収めたものの、一人ひとりの髪への想いを深く聞いてはいない。
前回からの変化と合わせて、ストーリーを知りたかった。

五人の髪が、ついに腰までの長さに揃った。前列左からナツミ・マイコ・サヤカ。後列左からユキコ・シオリ。

追記

ヘアスタイルだけでは語り尽くせない彼女たちの魅力を、インタビューの過程で筆者は知った。
『新緑の下で』では止むなく割愛し、再録増補版『アナザーストーリー』に書き加えた。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Sayaka

振り返った瞬間、そよ風でロングヘアが柔らかになびく。髪に手を触れる仕草にも風格を感じさせる。

「物心付いた頃から、ウエストまで髪があります。もう自然の一部みたいなもので、そうでない私は想像できませんね」とサヤカは話す。ほかの四人が髪を伸ばしている間、毛先を調整し続けていた。「ひょっとしたら、今は私が一番短いかも」と笑う。

ほかの四人がサヤカに憧れて髪を伸ばしたことは「素直に嬉しいです。でも、私から超ロングヘアを勧めたことは一度もないんですよ。むしろ、真似したら大変だよと言ったくらいです。これだけ長く伸ばすとシャンプーにも時間を要しますし、普段のケアに費やす手間もかかります。度々伝えたんですが、それでも伸ばしたいって」と答える。

結局サヤカは四人の意志を尊重し、ヘアケアをアドバイスしている。ただし、自分が身につけてきたノウハウを押し付けようとはしなかった。彼女たちが聞きに来たときだけ、相談に乗るスタイルを通している。四人の自発的な気持ちを大切にしたいからだ。また一人ひとりの髪質に合わせて、アドバイスするよう心がけている。

今後は「これまでと変わることなく、これからも今の髪であり続けられたら幸せですね」。サヤカの想いは揺るぎない。

穏やかな表情は終始変わらない。「新緑の中に身を置くと和みます」

マイコの話

もう、二十年来の親友ですね。

沈着冷静なんです。ただ私の前では慌てるところも見せますし、相談を持ちかけられることもあります。私も含め、ほかの四人のことをいつも気にかけています。こちらからアクションするときだけ、こうしたらいいんじゃないかなと言う人です。任せるところは任せてくれます。

周りがよく見えていると思います。ブレませんし、一本芯が入っていますね。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Maiko

丁寧に髪を梳かす。「外出時も大きめのヘアブラシを持ち歩いています。携帯用は、どうしても馴染まないんですよね」

　サヤカとは幼なじみで、マイコも小学生時代から背中まであるロングヘアを続けていた。腰までの髪を目指し始めたシオリの姿に接して、触発される。「私もサヤカと同じ長さにしてみようかしら」何気なく告げると、サヤカの返事は「好きにしたら」だったので、伸ばしたそうだ。「あのとき賛同されたら、長さを変えなかった」という反応は、二人の絆が深いからこそであろう。

「もし髪をバッサリ切ることがあるとしたら？」意地悪い質問には、少考ののち「例えば命に関わる病気をして、髪を切る必然性が生じたら、ヘアドネーションしたいです」。続けて「そうならない、健やかな暮らしが第一ですね」。再度少考し「ほかの四人も同じだと思いますけど、……ヘアドネーションのために伸ばしているわけじゃないんです。それ自体はいいことですし、否定もしないですが、私はロングヘアと共に生活したいから髪を伸ばしています」。キッパリと、筆者の目を見据えて答えた。料理が得意で、栄養士の資格も持っている。五人でホームパーティを開く際は、マイコがレシピを考えている。食に対する助言も惜しまない。

　控えめで、じっくりと想いを巡らせる姿が印象に残った。マイコは先を見ている。

サヤカの話

　マイコとは、幼いときからの付き合いです。ただ五人の場では、それを表に出さない人です。

　物静かで、目立たなくて、それでいて譲れないところは譲らない頑固さもあります。また、俯瞰する視点を持っているのも、彼女の強みではないでしょうか。皆んなと接するときも温かですし、ソッと下から支えているような存在ですね。

まったりとした微笑みにホッとする。サヤカとは無二の親友だ。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Natsumi

「ポーズ、決まってますか」。振り向いた笑顔が生き生きしている。ジーンズは毎日穿いても飽きない。

五人が着用している白いブラウスは、ナツミの考案だ。「髪の長さがよく分かるじゃないですか。春の定番ですし、新緑に映えますよね。ジーンズ大好きなのは、五人共通です。好きな服だと、より自分らしくいられます」

サヤカと親しくなり始めた頃は、肩下十センチほどの長さだった。「一言で表すと、サヤカちゃんは髪も立ち居振る舞いもエレガントです。私もああなりたいと思って」伸ばし始めた。腰まで到達したときは「サヤカちゃんと同じ長さになった喜びで満たされて、宝物を手にした気分でした」。

夢見るように語るとすぐ真顔になった。「これまで以上に、ケアが大事ですね。手間はかかりますよ。でも宝物のメンテナンスですから、愛おしく楽しいひと時です。かけがえのない身体の一部ですもの、大切にします」しみじみと話す。

「サヤカちゃんやマイコちゃんのような、しなやかで落ち着いた身のこなしができるように」と掲げた目標に、マイコは「メリハリのあるところが、ナツミちゃんらしくていいな」、サヤカは「今のままでも十分だと思うよ」と横から付け加える。「いやいや、私は結構おっちょこちょいだから……」二人の感想を受け、しきりに照れていた。

達成感に包まれても、ナツミは地に足をつけている。

髪に触れて笑みがこぼれる。「切り離せない、私の身体の一部です」

サヤカの話

五人の中ではファッションリーダーです。

彼女、ジーンズショップに勤めているんですよ、デニム好きが高じて。知識も詳しいです。今回着用している服や普段着など、ナツミのお店で私たちは買っています。彼女自身はこだわりがあるみたいですけど、普段の服装選びは一人ひとりの好みや適性に合わせてチョイスしてくれます。そこは商売ですからね。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Shiori Part1

ふんわりと、背中から腰にかけて髪がそよぐ。「ああ、超ロングヘアになったんだって実感します」

幼い頃から肩までのボブヘアがトレードマークだった。大人になっても貫くつもりでいた。

サヤカと出会い、腰まで届く髪が優雅に波打つ姿に心を動かされた。憧れを秘めつつ、ヘアスタイルは変えなかった。自分に相応しくないと、決めてかかっていたからだ。「長くしたら、色々手間暇かかるよ」サヤカからも釘を刺されていた。

きっかけは、ユキコのふとした言葉だった。「憧れているんだったら、シオリちゃんも伸ばしなよ。絶対似合うから」。当時のユキコは、シオリよりも数センチ髪が長くなっていた。――私も腰まで髪を伸ばす！ 背中を押されたようで、堰を切ったように本心があふれ出た。四人の中では最後発である（注。シオリよりも後から伸ばし始めたマイコは既に背中まであるロングヘアで、先に腰へ到達した）。

早く伸ばしたい。遅れた分、焦りもあった。四人からは「きれいに伸ばすことが大切だから」と待ってくれた。特にユキコは「伸びる過程を楽しみましょ」と励ましてくれた。おかげで楽になり、良い状態を保ちながら心待ちできるようになってゆく。この春、念願かなって髪の長さが四人に追いついた。サヤカから「きれい。ため息が出ちゃう」と褒められ、喜びはひとしおだったと述懐する。

「髪を伸ばしてから、学生時代の同窓会などで旧友に会うと『イメージ変わったね』『別人みたい』って言われて、驚いています。私自身は何も変わっていないのに。見た目が違うと、印象も違うんですね」とシオリは語る。

「これからは、髪のケアなど見た目の美しさだけじゃなく、内面から美しさがにじみ出てくるような女性になりたい。今度は焦らず、着実に少しずつでも」
憧れを現実に変えた今、シオリは次のステップを歩もうとしている。

サヤカの話

シオリは基本的に引っ込み思案で、ちょっと放っておけないところもあります。一途でひたむきな性格は、彼女の魅力でもありますね。読書家で、知識は豊富ですよ。本から吸収した思想を、自分に落とし込んでみる姿勢が彼女らしいですね。
おせっかいが過ぎない程度に、今後も四人でサポートしたいと思ってます。まあ、心配ないでしょう。

追記

見られていると恥ずかしいからとの理由で、あえて一対一でシオリは取材に臨んだが、終始緊張気味で表情も硬かった。筆者も話を交わしたり写真を撮ったりする際、リラックスできるよう努めたものの、至らなさを痛感した。
全員の取材終了後、シオリの希望で理解が足りなかった面を中心に話を聞き、撮影も行った。シオリにとっても、最初の取材は十分納得できなかったと、筆者に話してくれた。
パート２は誌面の都合で掲載できず、シオリの了承も得て、『アナザーストーリー』の一編として収録した。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Yukiko

思い切り腕を開き、左右に髪を広げた。スポーツ少女の面影がのぞく。

「髪、切ります」
　想定外の言葉を切り出され、筆者は間髪を入れず「どのくらい？」と聞いた。
「一センチくらい。だって、後ろ髪が腰を超えてお尻に届きそうなんだもの」
　親指と人差し指で一センチ幅を表現し、いたずらっぽく笑う。
「ついに長さを調整する段階に入ったんだなって。感慨深いですね」
　サヤカも「たぶん、いま一番長いのはユキコかな」と認める。

「『ショートヘアの方が似合うんじゃない？』って、よく言われます。自分でもそう思いますよ」
　あっけらかんと言ってのける。上の写真を撮っていて、短い髪の輪郭が浮かんで見えた。かと思えば、長い髪でないと表現できないドキッとさせるポーズをとる。少女と大人が同居している、ユキコの不思議な魅力だ。

　筆者が指示しなくても自在に動き回る。腰に手を当てて首を傾げるポーズでは「毛先が手で感じられるんですよ！ 凄くないですか！」と手放しの喜びようだった。

　陸上やバスケットなどに取り組んでいたが、心身の限界を覚えた頃にシオリの紹介でサヤカと出会った。それまでベリーショートの日々だったユキコに、腰まで届くサヤカの髪は衝撃だった。「単に長いだけじゃなく、サラサラで美しくて、鬱陶しさがないんです」。数日後にはスポーツ活動から一線を退き、ロングヘアになる決心を固めた。

　肩にかかる前後まで伸びた時期は、しばしば苛立ちが募った。結んだりまとめたりすれば軽減できるよ、というサヤカのアドバイスに助けられ、乗り切った。「『焦らないでね。時間が経てば必ず長くなるから』って、私が愚痴をこぼすとサヤカさんに励まされました。初心に帰れましたね。伸ばしている間は長いようで短かったし、総じて楽しかったですよ」と回想し、横からサヤカが「ユキコは気持ちが強いから」と補足した。四人の中でも、ユキコは最も短い状態からウエストまで髪を伸ばしている。

「髪を切ったら」と言われる度に「ショートは十二分に堪能したので、これからはロングを堪能します」と返すそうだ。
「サヤカさんのような長い髪になりたくて、ここまで伸ばしました。今の髪に満足していますし、断然大好きです。もう、ショートヘアに戻るなんて考えられません。ケアを欠かさず、長さをキープするのが目標です」
　ユキコの言葉に迷いはない。

サヤカの話

　ムードメーカーでしょう。天真爛漫で、なんでもズケズケと言う。それが時に、人を傷付けることもあるのが玉にキズです。もっとも悪気がないので、そこを理解してもらえれば打ち解けられます。最後に知り合ったのですが、あっという間に皆んなと仲良くなりました。得な性格ですよね。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Yukiko

振り向いて、妖しげな微笑をたたえる。大人の表情にハッとさせられる。
「色っぽいですね。自分じゃないみたい」ユキコ自身もお気に入りのショット。

手に触れる毛先が、嬉しくてたまらない様子だった。表情の豊かなユキコである。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

個別撮影とインタビューが終わり、再び五人が集まった。

筆者が撮影に使用したデジタルカメラの液晶画面を囲み、五人それぞれの写真をチェックしながら皆んなで感想を言い合う。和気あいあいとした時間が過ぎてく中、シオリが「もう少し、お話しと撮影をしてほしいのですがよろしいですか」と願い出た。シオリの眼に強い光が宿っているのを見て、筆者は応じることにした。三十分から六十分くらい時間を取る旨を他の四人に伝える。「写真を見返していますから、気にしないでください」とサヤカが代表して答えた。

その模様は『アナザーストーリー』に書いておいた。改めてシオリが合流し、恐縮する彼女を四人が温かく迎え入れる。

「個々にお聞きしましたが改めて、ヘアスタイルを含めて今後の目標をお願いします」

まとめ役でもあるサヤカが話す。

「五人の髪が腰まで届き、一つの目標が達成されました。ただ、ここがゴールではないんですね。新しいスタートだと思います。肉体的にも精神的にも健康を維持することが、髪の健康を維持することにつながる。見た目はもちろん、内面のケアも大切になるのではないでしょうか。あまり気張っても長続きしないので、自然体で行きたいですね。できるだけ長く、皆んなで長い髪をキープできたら幸せです。先に新しいスタートだと言いましたが、言い換えれば更新の連続であり、毎日がゴールなのかもしれません」

「それぞれの生活がありますから。一日一日を充実させたい気持ちは、皆んな一緒ですね」

ほかの四人は時折頷きながら、真剣な眼差しでサヤカの一言一句を聞いていた。

また機会があれば……筆者が申し出ると、サヤカは快く応じてくれた。

互いに手を振りながら五人と別れ、脳裏に焼き付いた一人ひとりの笑顔とエピソードを振り返る。
サヤカが話したとおりだった。見た目は同じだけれど、五人は違う個性を持っている。

いつかまた、会ってみたくなった。

ラストショットは、全員で手を振るポーズをお願いした。
実際に別れたとき、ユキコが大きく両手を振り、シオリとマイコは小さく手を振った。
前列左から、ナツミ・マイコ・サヤカ。後列左から、ユキコ・シオリ。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

アナザーストーリー

初出の『夏の邂逅』『新緑の下で』では紙幅の制約もあり、個人インタビューと髪型を主要テーマに据えた。
『アナザーストーリー』は、収録しきれなかった内容を再録に当たってまとめたものである。
インタビューの合間で交わされた、サヤカとマイコ・シオリとユキコのコミュニケーション。ナツミの社会人としての顔や、初出では触れられなかった彼女たちのパーソナルな一面を、新たに書き下ろした。
また本人の希望もあり、シオリには再度インタビューと撮影を行った。ちなみにサヤカの取材には他の四人が、マイコ・ナツミ・ユキコの取材には少なくともサヤカが同席しているのに対し、シオリの取材は二回とも一対一である。

初出の記事に必要最小限の内容修正や写真を追加したほか、高画質の写真に差し替えた。『アナザーストーリー』の写真は、最初から高画質で掲載した。

「たしかに見た目は同じです。でも中身は一人ひとり違いますよ」というサヤカの言葉を、改めて噛みしめている。
書き終えて、素敵な女性たちと出会えた偶然を幸せに思う。今後も折に触れ、彼女たちの取材を続けたい。

長い髪だけではない、彼女たちの魅力を感じてもらえたなら、筆者としてこれ以上の喜びはない。

二度目のインタビューを終えて、シオリは落ち着いていた。
カメラを真っ直ぐ見つめ、ポケットに手を入れたポーズで立つ姿に、筆者はシャッターを切りながら「きれい……」と声に出していた。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Sayaka & Maiko

カメラを構えると、サヤカがマイコの方へ上半身を寄せてきた。マイコも少しだけ身体を左へ傾ける。
長年の絆で二人は結ばれている。

　マイコの動画を撮影するため、ベンチのある広場へ移動した。五人の集合写真を撮影した場所でもある。親友のサヤカも同行した。

　動画撮影後、マイコの隣にサヤカが座る。

「長い髪に飽きることはないですか？」再び意地悪い質問をぶつけた。

「飽きる……」不思議そうにサヤカが反芻する。

「私たちには、長い髪に飽きるという概念はないですね」

　直後に右手で口を押さえ「私たちって言ったけど、マイコもそうだよね」と視線を送る。

「もちろん」サヤカへ即答すると、マイコは少考する。

「……適正な例えなのか、分からないのですが」そう前置きして続けた。「長い髪は、自分にとって空気みたいな存在なんです。空気に飽きる人って、いないですよね。たぶん、サヤカも同じような考えだと思う」

「もちろん」すかさずサヤカが口を挟む。二人で顔を見合わせ、笑いあった。背中や胸元の髪が、軽やかに跳ねる。

　普段のサヤカは、実家の喫茶店を手伝っている。開業から半世紀を経ており、高校・大学の通学ルートに当たるため、学生の利用が多い。母親と祖母の三人で、交代しながら二人体制で店に立っている。サヤカが店を手伝うようになったのは、高校に進学してからだ。

　幼なじみのマイコとは家族ぐるみのお付き合いで、子どもの頃からマイコはメニューのアイデアを提案していた。栄養士となった今でも新メニューの開発に協力するほか、既存メニューのマイナーチェンジを監修している。ナツミとシオリは、サヤカのお店へ客として通うにつれて親しくなった。シオリと知り合って数カ月後、彼女は友達を伴って来店した。ユキコである。

　仕事柄、マイコがカメラの操作に慣れていると知った。

「お料理を作ったら、写真に収めることにしています。カメラも常備しているんですよ。荷物は多くなりますけど、……仕方がないですね。五人をはじめ、ほかのお友達と集まるときも、撮影係になっています」「前回の夏と今回は撮られる方に回ったので、緊張もありましたけど楽しかったです」時々笑みを浮かべながら話す。

　サヤカが話を締めくくった。

「気兼ねなく話せる仲ですけど、どうしても話せない秘密は、お互い持っています。そこは、立ち入らないようにしています。マナーですね」

「だから、サヤカとは安心して付き合えると思っています」。マイコが言い添えた。

　心地よいそよ風が、広場を吹き抜けていく。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Sayaka & Maiko

「もう、サヤカったら」「うふふ……」会話が弾み、笑いが止まらなくなる。マイコが優しく肩へ手をかける。
「肚を割って話せる、かけがえのない関係ですね」と話すサヤカに、マイコも頷いた。

ミラーレス一眼レフカメラを手に持つマイコ。
「お写真撮りましょうか」。ナツミに勧められて、筆者がひと休みしている際も声をかけてくれた。
次頁に、マイコが撮影した写真を掲載した。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Photograph taken by Maiko

「少し休みませんか」とナツミに促され、一緒にくつろぐ筆者（左）。
暖かい陽気とナツミの気遣いに、体も心もぽかぽかなひと時だった。

最初のインタビュー・撮影後のシオリ。筆者がユキコの取材中に撮影。

マイコの話：納得の一枚が撮れました。液晶画面を見合って「かわいいね」と伝えたら、シオリちゃんがとても嬉しそうに「ありがとうございます」って言ったんです。自然な笑顔ですよね。もう一度、取材を受けたくなったきっかけなのかも。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Natsumi & Some people

インタビュー中に、ナツミの勤める店でよく衣料品を購入しているＳさんに声をかけられた。
「今日は仕事お休み？」「ええ、そうなんです。お散歩ですか？」。店員の顔に切り替わった。Ｓさんの許可を得て撮影。

　インタビュー中に出会ったＳさんは「服選びで迷ったときは、いつも彼女（ナツミ）に相談するんですよ。親身に話を聞いてもらえます」と語る。筆者が「人気店員ですね」と彼女に向けたら苦笑した。「いやいや、私はまだまだです」

　Ｓさんが去って、ナツミが過去の経験を話し始めた。「今の店に勤め始めた当初は、まるでダメでしたね……」

　ナツミが自分のセンスで商品を提案しても、来店客の反応は芳しくなくなかった。首を傾げられたり、私には合わないと言われたり。次第に、ナツミが来店客に近づくと敬遠されてしまう。店長からは「一方的に好みを押し付けるんじゃない」と注意された。「いいと思って勧めているのに……」ナツミはショックを受け、理想と現実のギャップに苦しんだ。

　考えが変わったきっかけは、その頃に受けたサヤカのアドバイスである。

　サヤカが手伝う喫茶店には学生時代から通っていたが、常連客の一人で面識がある程度に過ぎなかった。立ち寄ったある日、客がナツミだけになるとサヤカから話しかけられ、とりとめもない世間話になった中で、ナツミは悩みを打ち明けた。相槌を打ちながら聞いていたサヤカは、ナツミが話し終えるとひと呼吸置いて話し始めた。

「好みって、人によって違うよ。お客様が求めている好みを知らなきゃ」

「知ろうとしているつもりなんだけど」

「頭の中が、自分のことで一杯なんだと思う」

　ナツミはハッとした。店長の注意する意味が、身体感覚で理解できたのだ。

「……どうしたらいいんだろう」

「頭の中に、お客様のためのスペースを開けておくといいんじゃないかな。自分の好みは、そのままでいいから」

　学生たちがドヤドヤと来店し、話は途切れた。サヤカの背中で揺れる長い髪が、エレガントに映った。精算するとき「親友と二人で、今度ジーンズショップへ行きます」とサヤカが言った。

「あのときのことがなかったら、今の仕事は続けられなかったでしょうね」とナツミは振り返る。そばでサヤカが「思い詰めたようで、暗い翳を見たんです。気になって……」と付け加えた。

　店頭に立つ間は心を空にし、目と耳を澄まして来店客を観察し、何を求めているのかを知ろうと集中した。それから自分の領域とも言える、情報収集した流行やスタンダード、時には自分の好みにも照らし合わせ、適切な商品を提案することに努めた。次第にナツミは来店客の信用を得るようになり、店長の信頼も厚くなった。

　ところで『夏の邂逅』『新緑の下で』で五人が着用している服は、ナツミのこだわりが反映している。「無理言って、わがままを通してもらっています。五人ともデニムコーデは大好きですし」そう言って照れた。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Yukiko & Shiori

シオリのインタビュー・撮影が終わり、次に撮影するユキコが「お願いします」と筆者に声をかけて近づく。
終始緊張気味だった、シオリの表情が明るくなる。
持参したミネラルウォーターの水を、ユキコは紙コップに注いだ。
「シオリちゃん、お疲れさま」
「ユキコちゃん、ありがとう。喉カラカラなの」手渡され、シオリは水分を口に含む。
ユキコも自分の紙コップに水を注ぐ。
「撮影、どうだった？」
「ポートレートなんて初めてだから、もうあがっちゃって。記者さんが私のペースに合わせていただいて。『そのままでいいよ』とおっしゃるので、少し楽になれたかな。だけど、よくわからないうちに終わった感じ」
「シオリちゃん、あがり症だもんね」
「その点、ユキコちゃんは度胸がいいから」
「私はただ、思い切り臨んでいるだけだもん」
「そこが凄いんじゃない」

会話が止まらなくなる二人に、素顔を垣間見た気がした。

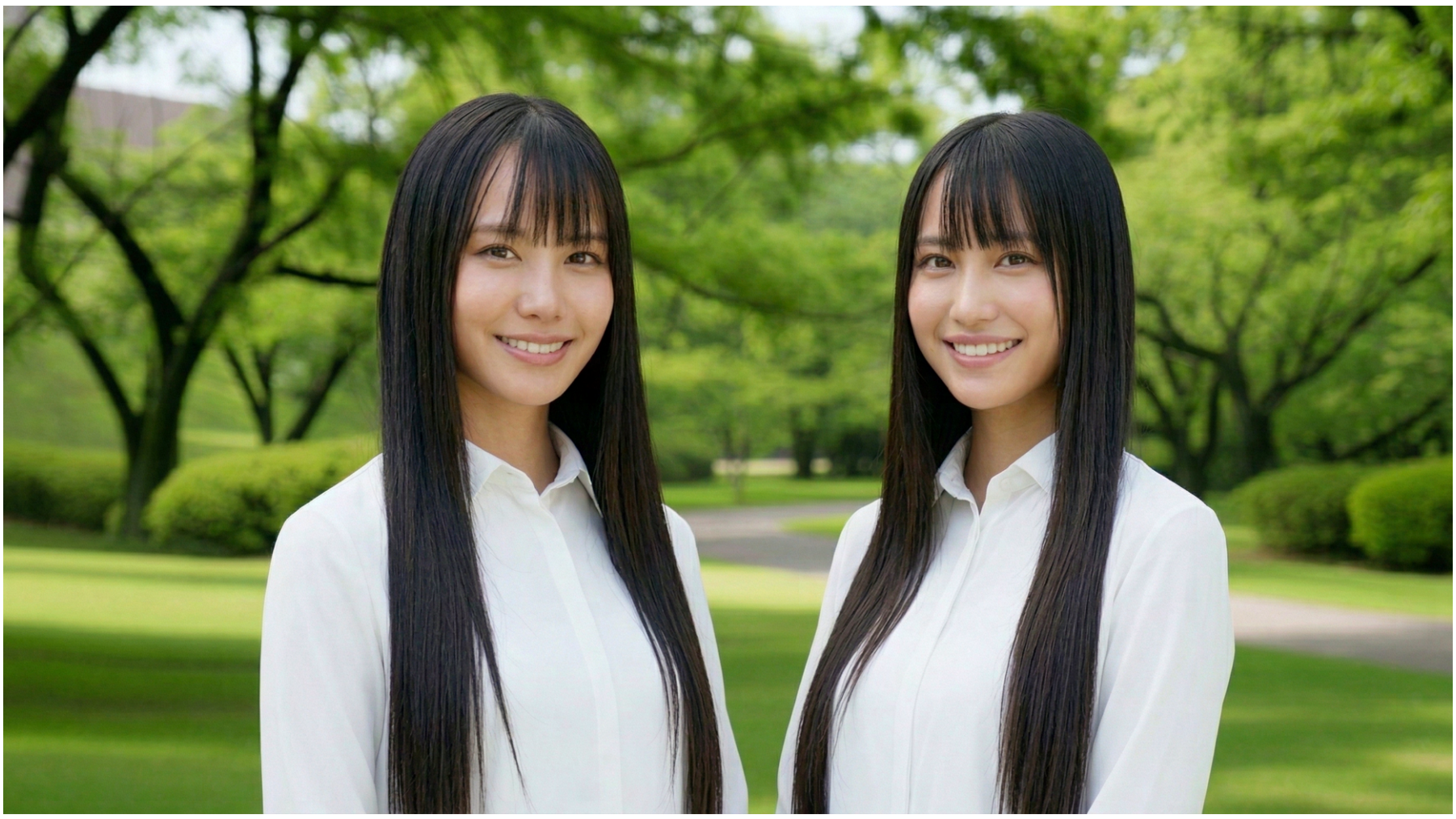
「お疲れさま」。撮影を終えたシオリ（右）をねぎらい、感想を聞くユキコ（左）。
「喉カラカラなの」と、緊張から解放されたシオリの表情が印象的だ。これからインタビューとポートレートを受けるユキコは余裕がある。

「私とシオリちゃんは学年が同じなんです。よく二人で会って、買い物や食事をするんですよ」とユキコが話す。「サヤカさん・マイコさん・ナツミさんは、私達より年齢と学年が上なんです」とも。ナツミによれば「シオリちゃんとユキコちゃんは、私の勤める店に二人で来ますよ。もう、姉妹みたいに仲がいいんです」とのことである。

少しはにかみながら、二人同時に髪をかき上げる仕草は、ベリーショートやボブスタイルから髪を伸ばしてきた喜びにあふれていた。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Yukiko & Shiori



「ユキコちゃんと一緒にいると心強いです」とシオリが言えば、「シオリちゃんは癒しの存在ですね」とユキコが話す。

二人で微笑み合いながら、髪をかき上げる。胸元へ垂れる髪の長さに、夢を叶えた歳月を意識するという。

「頑張って伸ばしてよかったと思う瞬間だよね」（ユキコ）。「嬉しいし幸せ。ちゃんとケアして、きれいな長い髪でいたいな」（シオリ）。

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Yukiko & Flower

ベンチに座り、ツツジの花を愛でる。「見ごろは春です。一つの木から二色のお花が咲くのって、珍しいんですよ」
「お花を見ていると励まされます。慎み深いですよね。私も見習いたい」

専門学校卒業後、ユキコは花屋でパートをしている。シフトには、週に四日から五日間入っている。

主な仕事は、店主夫婦が仕入れてきた花のディスプレイや水やり・清掃といった作業で、ごくたまに会計も担当する。自ら積極的に接客することは少ない。基本的な知識を持っているので、お客様から質問される場合は丁寧に応じている。

「お花と会話するような気持ちで観察し、接しています。ペットと同じ感覚ですね。マメにお世話していると、お花が微笑んでいるように見えるんです。不思議ですね。だから続けられると、思っています」

後日、花屋を経営するご夫婦にお話を伺った。

ご主人は「華奢な体なのにバイタリティーがあって、大抵の力仕事は平気でこなしますね。こちらから『無理しないようにね』と声をかけるほどです」、奥様は「ユキコちゃんは、お店に欠かせないスタッフとなっています。いつも元気で明るくて、お客様にも笑顔で接してくれます。地味な仕事が多いのに、何をするにも楽しそうで……」と語る。

ご夫婦の話をユキコに伝えると「楽しそうに見えるのは、好きなお花に囲まれているからではないでしょうか。気にかけてくださり、ありがたいです」と答えてくれた。

インタビュー時の話に戻ろう。

ユキコの家では、小さな庭に花や野菜を育てている。手入れする母親を幼い頃から手伝ううち、花への興味を抱き始めた。自分の部屋にも観葉植物を置いてある。気持ちが乱れているとき、向かい合っていると心身の底から鎮まってくる。

スポーツ活動に区切りをつけた理由の一つに、花好きを人生に活かしたい気持ちがあった。「体力が養われたことは、今の仕事に生きています。無駄じゃなかったですね。限界は分かっているつもりなので、無茶しないよう気をつけています。年間通して手荒れは要注意で、手袋が必需品です。接客では、不用意に傷つける言葉を口にしないことを心がけています。一言多いタイプなので」

ジーンズで仕事できる点も、うれしいという。「好きな服を着られるのは幸せです。サヤカさんやナツミさんも、ジーンズ姿で働けるからラクで動きやすいって話していました。マイコさんとシオリちゃんは、仕事でデニムはＮＧだそうです。二人とも、普段着はほとんどジーンズですよ」

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Shiori Part2

トートバッグの中には、必ず本を一冊入れておく。移動中は気軽に読める作品を、家ではじっくり読む作品を選ぶ。
「お部屋で読書していると、時間が過ぎるのを忘れてしまいます」

予備のカメラを携える。日が西へ傾き始めていた。

並んで歩きながら「読書好きだそうですね。サヤカちゃんから聞きました」と話しかける。糸口を開きたかった。
「ええ、そうなんです。先ほどは質問を答えるのに精一杯で、緊張しっぱなしでした」

筆者も仕事柄もあって読書好きであると伝え、好きな作家が一致すると、シオリの目が輝いた。互いに一押し作品を言い合い、印象に残る場面などを語り合ううち、シオリの言葉が熱を帯びてきた。

もう大丈夫だろう。改めて話を聞く。

読書を一言で表せば「知ることです」と語る。
「感じるとか、考えるとか、ほかにも言い方はあるのですが、それらを含めて知ることですね」

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

Shiori Part2

幼い頃から絵本が大好きで、小学生になってから小説や漫画を読むようになった。

進学するにつれ、ジャンルを問わず興味を覚えた本は手にとって読破している。どちらかと言えば遅読で、特に小説では物語の世界に浸りたいので遅くなるそうだ。ユキコとは高校の同窓生で、偶然隣同士の席になり、読書感想文の書き方に悩むユキコへアドバイスしたのを機に親しくなった。サヤカの喫茶店に通い始めたのは、心置きなく本が読める場所だからだ。お気に入りである、奥の窓際の席で読書に集中する姿はサヤカの目を引き、交流を重ねるようになった。

知人の紹介もあって、シオリは図書館でパート勤務している。貸し出しする本を探したり、返却された本を整理したり、蔵書の管理や配架といった仕事が主で、カウンター業務に就くことはほとんどない。蔵書の管理では、パソコンを操作することもある。本に囲まれた環境で、黙々と作業を進められる点が、自分向きとシオリは実感している。

読書の魅力やインターネットについて、間を挟んで考えつつ、シオリは答えていった。

「色々な人の生き方や、感じ方や考え方を、読むことで理解し、疑似体験できますよね。過去も、未来も。良いことも、悪いことも。読んだ内容を自分の中で消化して……いま、そして未来へ継承していきたいことは何か。繰り返してはいけないことは何か。自分で判断できる材料の一つになると思うのです。安易に流されない、自分なりの物の見方・考え方を、読書を通して身につけたいのです」

「スマホやノートパソコンは持っていますが、ＳＮＳは一切しません。得体の知れない大きな波にさらわれそうで、私には向いていないですね」。アカウントを開設したら人気者になるかも……と水を向けたら「目立つのは好きじゃないので。静かに暮らして、生命を全うしたいです」。話す間は終始姿勢を正し、筆者の目を見据えた。

ひととおり話を聞き終えてから、撮影に入った。ポーズと表情に、一回目よりは遥かに落ち着きと眼力があった。

次のステップを、シオリは地に足をつけて歩むに違いない。

シャッターを切りながら「きれい……」と嘆息した筆者に、シオリは「本当ですか？　うれしいです」と口元が緩む。緊張や気負いのない表情が撮れた。液晶画面をのぞき込んだシオリと筆者は、会心の笑みを交わした。

誌面のスペース上、最初のインタビューを掲載することになると思う。申し訳ないけれども、今のインタビューは後日に何らかの形で紹介できれば……理解を求めると、シオリは迷うことなく晴れ晴れと答えた。

「お任せします。すべてが私ですから」

Docusign Envelope ID: 21BA0C88-917C-4CC6-AF94-E27B87EF6876

増補版あとがき

新たな話を増補版に加えました。

初出との変更点は『アナザーストーリー』冒頭で記したとおりです。なお「『夏の邂逅』『新緑の下で』では紙幅の制約もあり……収録しきれなかった」などと書いてありますが、実際は初版公開後に生成した画像から着想が浮かび、執筆したものです。

メディアの女性記者である「筆者」が、五人の女性へ聞き書きして写真撮影する、架空のルポルタージュを雑誌記事風に構成した本作は、ＡＩの急速な進歩――殊に画像の同一人物と風景造形――がなければ成し得なかったことです。

元々は、ヘアスタイルを描いた内容に過ぎませんでした。『アナザーストーリー』を書くことで、五人の日常や人生観の一端に触れられたと思っています。「見た目は同じでも、中身は一人ひとり違いますよ」とサヤカが話したように、ひたむきに日常を生きる五人の姿を少しでも感じ取っていただけたなら、作者としてこれ以上の喜びはありません。

彼女たちの物語に最後まで寄り添ってくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。

二〇二六年春

著　者

髪が結ぶ、五人の約束 夏の邂逅・新緑の下で 増補版

著者：灯島史料（あかりしま・しりょう）

２０２５年１２月 ８ 日 初版公開
２０２５年１２月２７日 改訂初版公開
２０２６年 １ 月 ２ 日 三訂初版公開（電子署名）
２０２６年 ４ 月１５日 第２版公開

署名者:
灯島 史料
87E681C74A12481...

本作品は、Gemini との協働により制作したものです。

画像・動画・音声の制作は、Google の動画生成AI「Veo」その他の生成AI技術を使用しています。

本作品に登場する人物・地名・団体等の名称はすべて架空のものであり、実在の人物や事象とは一切関係ありません。AIによって生成された容姿や音声が実在の人物に酷似していたとしても、意図しない偶然の一致によるものです。

本作品に含まれる画像・動画・テキストの無断転載・複製・加工・送信、およびそれらを用いた二次的著作物の制作・公開は、営利・非営利を問わず固くお断りいたします。

【ご利用上の注意とお願い】

登場人物（サヤカ・マイコ・ナツミ・シオリ・ユキコ等）のイメージを損なうような改変や、AIを用いた再生成による公開もご遠慮ください。

ダウンロードされた本作品は、ご本人の鑑賞用としてお楽しみください。SNS等での一部引用（紹介など）を除き、第三者への再配布や公開はお控えいただけますと幸いです。